

# 〈毒婦〉と女子教育

——「蝮のお政」を例として——

眞 有 澄 香

## はじめに

〈毒婦〉とは「悪知恵にたけた女。腹黒く、人に害を与える女。悪婦。奸婦」をいうが、日本近代文学史上からいえば、明治10年代から20年代までの一時期に小新聞を賑わせた「つづきもの」による「高橋お伝」や「鳥追お松」「花井お梅」などがその代表格といえよう。

たとえば、田中貴子が『〈悪女〉論』で取り上げている女性たちは、「称徳天皇」（未婚の天皇でありながら道鏡らとの愛欲に溺れた）や「染殿后」（摂関家の令嬢であり国母でもありながら鬼と性的関係を持った）などであり、ある女性が〈悪女〉と呼ばれる共通項として政治的な権力や学問的な権威と男性との関係が指摘されている。一方、朝倉喬司『毒婦伝』には「高橋お伝」「花井お梅」「阿部定」が取り上げられており、犯罪へと駆り立てられていく彼女たちの欲望や狂気が問題視されている。それからすれば、権力を私物化した性質の悪い女性が〈悪女〉と称されるのに対し、一庶民の女性がその美貌を武器に男たちを弄びながら自己の欲望を満たそうとして犯罪者になっていくのが〈毒婦〉ということになるうか。

前掲書において田中は、〈悪女〉は「男性との関係において作られる」

ものであり、「男性側の価値基準による女の尺度」<sup>5</sup>とも説いているのだが、〈悪性〉と〈毒性〉という差こそあれ、両者は戦乱の続く中世期や明治維新による近代日本形成期という、いうなれば、混沌とした時代を背景に造形されていった一つの女性像であった。

それが「男性側の価値基準による」ものという、いわばジェンダー研究の観点から〈悪女〉の成立過程を捉え直した田中の功績は大きいと思われるが、一方の〈毒婦〉に関するまとまった研究としては興津要『『つづきもの』の研究』<sup>6</sup>をみるに過ぎず、近代文学形成期における過渡的な一現象として触れられる場合がほとんどである。

しかしながら、日本近代文学の黎明期に、「つづきもの」として〈毒婦〉たちが、なにゆえ演劇化や単行本化などでもてはやされたのか。維新の混乱期という特異な時代状況のなかで、庶民は〈毒婦〉たちに何を求めたのか。そうした〈毒婦もの〉の位置や意義についてこれまで十全に論じられてきたとは言い難い。そこで、ここでは、〈毒婦〉のなかでもとりわけ前科10犯の窃盗犯として名を馳せた〈蝮のお政〉を取り上げることで、これまで看過されてきた明治30年代の「つづきもの」の有り様の一端を明らかにし、さらに、制度化へと向かっていた当時の教育界との関係性についても考察を加えてみたい。

## 二人の〈お政〉

ここで取り上げる〈蝮のお政〉は、〈島津お政〉とは別人である。「毒婦お政」というと〈蝮のお政〉と考えられがちであるが、〈蝮のお政〉の本名は「内田まさ」であり、前科10犯を勲章にした女掏摸で、〈島津お政〉とは出身地も罪状も入獄時期も異なる。ちなみに、〈島津お政〉の経歴については拙稿「〈毒婦〉という教育——〈島津お政〉の造形にみる近代日

## 〈毒婦〉と女子教育

本の文学と教育——』<sup>7</sup>に詳述したのでここでは触れないが、たとえば、志賀直哉『暗夜行路』（「前編」は大正11年7月、新潮社刊）には、「祇園の八坂神社」の近くで見かけた「長いマントを着、坊主頭に所謂宗匠帽を被」る女性が「蝮のお政」と記されている。しかし、これは出所後に剃髪して懺悔芝居を展開した〈島津お政〉の晩年の姿とみるべきである。同じように、早稲田大学演劇博物館所蔵の芝居番付「なもひびくどくふさんぽものがたり雷島津政懺悔譚」（明治24.11.9、寿座）も〈蝮のお政〉のものとして分類整理されている<sup>8</sup>。この外題に「島津政」と明記されているように、この芝居番付は明らかに〈島津お政〉のものである。にもかかわらず、「毒婦お政」というと、〈島津お政〉と〈蝮のお政〉とが混同されることが多いので、まず、その点を断っておきたい。

ただし、後述するように、明治20年12月11日に特赦の申し渡しを受けた〈島津お政〉が、明治24年から30年代後半にかけて、「懺悔芝居」と銘打った演劇によって一世を風靡していたことから、〈蝮のお政〉もこれに倣って舞台上がったことは事実である。したがって、二人の「お政」は、いずれも「毒婦」と謳われていたのであり、その経歴は単行本化され、それを芝居にして自らも舞台上がっていたという点で、二人には大いに共通するところがあることは確かである。

## 〈蝮のお政〉の登場

明治31年7月2日付の「都新聞」には、「蝮のお政」に関するつぎのような記述がみられる。

きたる米五日より掲載すべき探偵実話ハ「まむし蝮のお政」と題して可憐玉の如き少女が一旦情人の為江湖に放浪して端なく罪惡の淵に墮落し眼の

あたり昨年十一月七日芝警察署の手にて三田台町に逮捕せられ現に市ヶ谷監獄署に苦役されつゝあるまで其の徑路或ハ多恨忽ちにして艶麗春花の如く忽ちにして悲愴秋風の如く波乱あり曲折あり巧みに此の佳人の生涯を叙し来つて其の興味津々たる将さに日本哀史を読むが如き感あらん

これは第一面に「社告」として掲載されたものだが、〈蝮のお政〉が芝警察署に逮捕された8ヶ月後の記事であることから、この「都新聞」がいち早く〈蝮のお政〉の来歴を伝えたとみていいだろう。この記事の後には「最新の事実を事実として伝ふるハ最も本紙が誇るに足るべきところ」と記されており、実際には、「探偵実話蝮のお政」と題された〈蝮のお政〉の物語は、この「社告」より一日遅れた明治31年7月6日から翌32年1月22日まで全159回に亘って連載された。

半年にも及ぶこの「つづきもの」は、連載中の明治31年12月には『都新聞探偵実話蝮のお政』（金槇堂）と題された「前編」として単行出版され、続いて翌32年2月に「中・後編」が出版されている。これは、「都新聞」の連載が好評だったことを受けて、連載開始から5ヶ月後に「第一回」から「第七十回」までが「前編」として刊行されたと考えられよう。その後、「第七十一回」から「第百十五回」までが中編、「第百十六回」から大団円の「第百五十九回」までが後編として2月18日に刊行された。これは、新聞連載が終了した1月22日から1ヶ月も経たない、迅速な単行本化である。

六一 「都新聞」に連載された「探偵実話蝮のお政全159回」と単行本化された『都新聞探偵実話蝮のお政』（金槇堂）とは全くの同一内容である。ただ、新聞連載では、毎回といえるほど挿絵が挿入されているが、その絵は単行本とは違ったものに差し替えられている。

〈蝮のお政〉の経歴

「都新聞」が「事実を事実として伝ふる」ことを誇っていると記しているところから、ここで『都新聞探偵実話蝮のお政』に拠りながら〈蝮のお政〉の経歴について簡単に紹介しておきたい。

本名は内田まさ。愛知県知多郡内海町の大工の棟梁内田喜左衛門の長女。母親を早くに亡くしたまさは、柔和と愛嬌を兼ね備えた孝行娘だった。しかし、次女のおたみが乞われて三代続く酒造家に嫁いで以来、自分も金満家への興入れを望むようになる。その頃、小学校の教員だった尾州犬山の士族内藤菊次郎と出会い関係を持つ。ところが菊次郎には妻子がいた。

そのため、孝行娘として知られていたまさは行き場をなくし、やむなく故郷をあとにする。その後、水谷町の紙屑問屋刈谷家の居候として落ち着いたまさは、強欲な刈谷夫婦にだまされて和尚の妾にされるなど、刈谷夫婦の悪事に荷担させられていくことになる。そうして、刑事に追われる身となったまさは、小石川に遊亀次と世帯を持つが、金銭的に行き詰まって妾奉公に出るようになる。その後、まさは奉公先で信用を得ると窃盗を繰り返し、出所しては逮捕される。そのうち、亡き母の13回忌を前に改心し、老いた父親に面会すると心も晴れて、遺書を認め潔く自害しようとする。そこに予てからまさを追っていた巡査に捉えられ、これまでの偽名や悪事はすべて露見するに至る。

以上が『都新聞探偵実話蝮のお政』に書かれている〈蝮のお政〉のおおよその経歴だが、篠田鉦造『幕末明治女百話（下）』の「蝮のお政のご牢内の女囚話」<sup>9</sup>によれば、〈蝮のお政〉が初めて入獄したのは明治15年5月で、翌年には身重のまま2度目の入獄、明治18年6月には牢内で花井お梅と一緒になったという。

まさが〈蝮のお政〉と呼ばれたことについて、前掲書にはつぎのように記されている<sup>10</sup>。

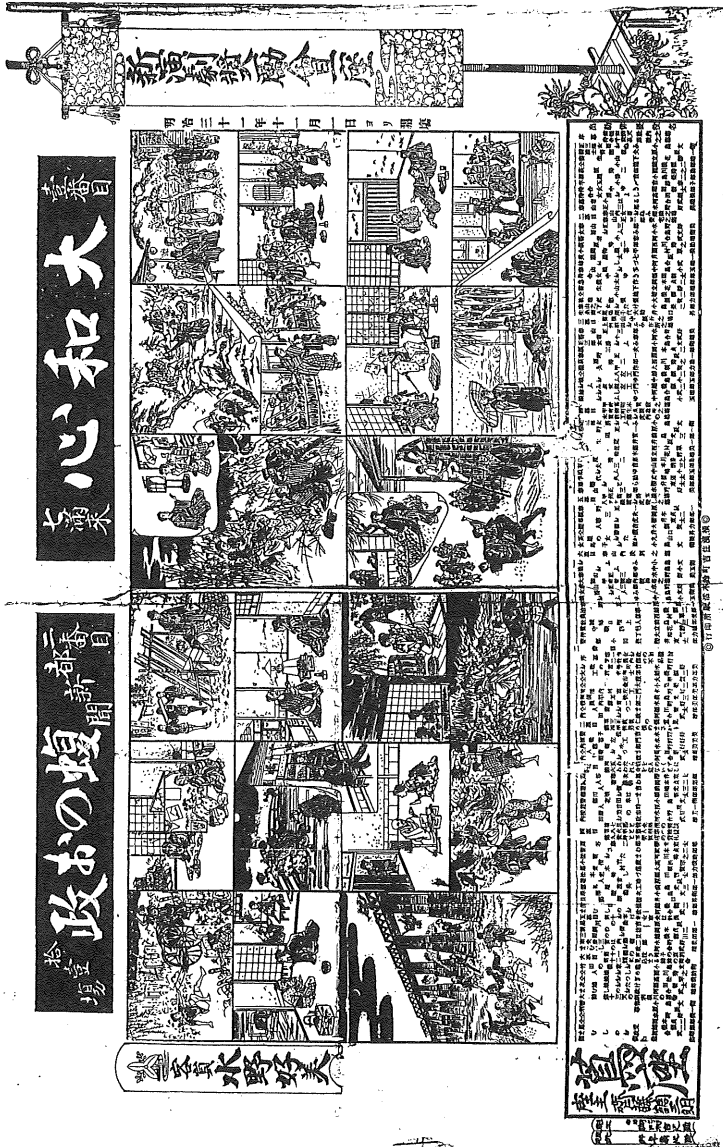
自分ながら働く時はガゼイに、骨身を惜しみませんが、狙うものは金箱ですから、ソレで<sup>まむし</sup>蝮のお政なんかと、刑事さん達につけられたんでしょ。別段股倉に蝮の<sup>ほりもの</sup>彫青がしてある訳でもなければ、そう執念深い<sup>たち</sup>といった質でもありません。

窃盗を繰り返し、偽名を使いながら、たびたび女囚として鍛冶橋監獄や市ヶ谷監獄に入獄したまさは、「はみ」の古名を持つ、有毒で狙った小動物を逃さない「蝮」のようなしぶとさをイメージさせる女性だったのだ。

### 〈蝮のお政〉の演劇化

実際の事件を報じた記事を基に「つづきもの」として「都新聞」に連載された〈蝮のお政〉は、連載直後に単行本化され、まさが入獄中だったにもかかわらず、芝居として上演されることになる。その記録は、いくつかの芝居番付として早稲田大学演劇博物館に所蔵されている。

まず、次頁に資料(1)として掲げたのは早稲田大学演劇博物館所蔵の横浜蔦座の芝居番付である。この芝居番付から、「つづきもの」から単行本化された『探偵実話蝮のお政』は明治31年11月1日から芝居として上演されていたことが確認できる。また、この蔦座での上演は好評だったらしく、続けて同月23日からの芝居番付も残されている。ちなみに、管見では、この芝居番付が〈蝮のお政〉の上演記録としては最も古いものである。



資料(1) 明治31年11月1日 〈蝮のお政〉の芝居番付  
 (早稲田大学演劇博物館所蔵、資料番号口 22-00062-0009-018)

上演者である「新演劇奨励会一座」とは、資料（1）の芝居番付にも「客員水野好美」と記されているように、河合武雄が水野好美らと浅草の常磐座を根城に「奨励会」を起こし、「奨励会新演劇」と銘打って、明治31年から7年間常打ちしていた一座である。それからすると、資料（1）の横浜蔦座の芝居番付は、当時「奨励会一座」は浅草と横浜の双方で活躍していたことを物語る資料ともいえよう。ちなみに、この頃、横浜で人気を博していたのは川上演劇である。いうまでもなく、川上演劇は「オッペケペー」で一世を風靡した川上音次郎が明治24年に川上書生芝居を旗揚げし、その後の新派劇発展の基礎を固めた一座である。川上は、29年に神田に川上座を開場し、32年（1899）には女優で妻の貞奴とともに一座を組織して欧米を巡業したが、明治30年12月には横浜蔦座の10年祭興業に招聘されるなど渡米までの明治30年前後には東京だけでなく、横浜でも活躍していたことが確認できる。参考までに、明治30年12月1日から開演された蔦座10年祭の芝居番付を資料（2）として、続く明治33年9月5日に喜楽座で開演された「川上演劇」を資料（3）として次頁に掲げておこう。蔦座10年祭の出し物は「義侠之犯罪」と「勤王美談梅田源二郎」。喜楽座での「川上演劇」は「川上音次郎欧米渡航中」に上演された「勤王の志士坂本龍馬」を中心としたものである。したがって、「川上演劇」は、東京・横浜の劇場で、いずれも勤王攘夷運動と志士たちを題材にした壮士芝居を行っていた。

ことに、ここで注意しておきたいのは、その頃の横浜では、〈蝮のお政〉だけでなく〈島津お政〉の懺悔芝居も並行して上演されていたという事実である。その詳細は前掲した拙稿を参照していただきたいが、〈島津お政〉の懺悔芝居が、明治24年から37年にかけて、横浜蔦座を中心に、全国を巡業しながら上演を続けていたことは確かである。





# 劇 演 上 川

明治三十三年九月五日午前九時開演  
 明 治 三 十 三 年 九 月 五 日 午 前 九 時 開 演  
 明 治 三 十 三 年 九 月 五 日 午 前 九 時 開 演  
 明 治 三 十 三 年 九 月 五 日 午 前 九 時 開 演

香屯  
目原

田原  
光吉

松本  
幸次

## 龍本攻

五幕

勤王の名士

大空

三幕

女

三幕

上中下

大空

女

上中下

芝居番付  
 木戸 小次郎 四七 録録  
 香屯 田原 松本  
 目原 光吉 幸次

(行印所蔵 芝居番付 芝居番付)

五五

資料(3) 明治33年9月5日「川上演劇」の芝居番付  
 (横浜開港資料館所蔵)

これらの芝居番付すれば、自由民権思想を広める目的で始められた川上演劇の書生芝居は、「毒婦」の懺悔芝居と人気を二分する関係にあったとみることができる。高らかに自由と民権の新時代の到来を歌い上げる書生芝居と、浅知恵と欲望から罪を重ねていった「毒婦」の懺悔芝居とは、いわば、近代国家形成期に我が国が抱えていた表と裏の顔でもあったのだ。

ところで、横浜の劇場街は、その名も賑（にぎわい）町と呼ばれた一画（現在の伊勢佐木町）が中心で、そこには盛り場も集まり、東京浅草や大阪千日前、京都京極に劣らないほどだった。特に、日本でいち早く西欧化を進めた開港の町として、横浜の劇場は競って翻訳劇や書生芝居のような新演劇を取り入れるなど、進取の気象に富む土地柄だった。横浜開港資料館には、明治から大正期にかけての劇場街の賑わいぶりが記録された写真も残されている。その写真は、正面に大きな絵看板を掲げた劇場が建ち並び、通りの両側には多くののぼりがはためくなか、日傘を差した羽織姿の女性やパナマ帽を被った男性、和服の子供たちが行き交う姿が写されたもので、当時の活気溢れる街の様子が伺える。ちなみに、明治34年12月29日付「東京朝日新聞」には、「不景気々々とこぼしながらも、猶銭費ひを控えぬもの多しと見え、今年は横浜の芝居・寄席の収入昨年に比べて非常に多く」とあり、この記事からも横浜の劇場街の賑わい振りを知ることができる。

つぎに紹介しておきたいのは、明治32年3月15日発行の小冊子（芝居のプログラム）である。資料(4)「明治32年3月15日〈嫂のお政〉の小冊子」（早稲田大学演劇博物館所蔵）として次頁に掲げておこう。この表紙には「新演劇奨励会一座」とあり、配役や役者名の上の絵図には、孝行娘だったまさが紳士と出会い、騙された末に、妾や女中奉公をしながら、男性遍歴を重ね、果ては巡査に捕らえられる様子が描かれている。また、「役人替名」をみても、お政の父親は「内田喜左衛門」、お政の情人は「岸沢遊亀次」など、実名が掲げられていることから、常盤座での上演が『探

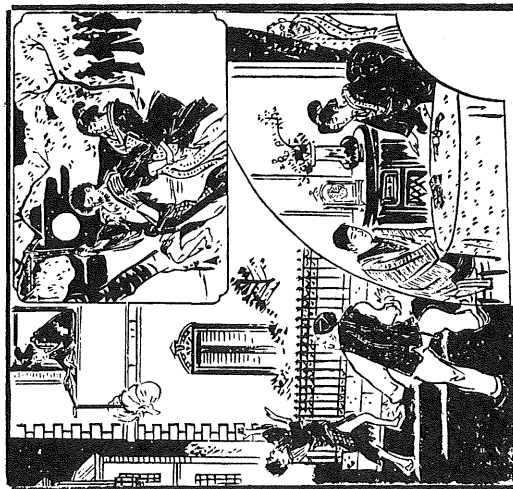


### 役人替名

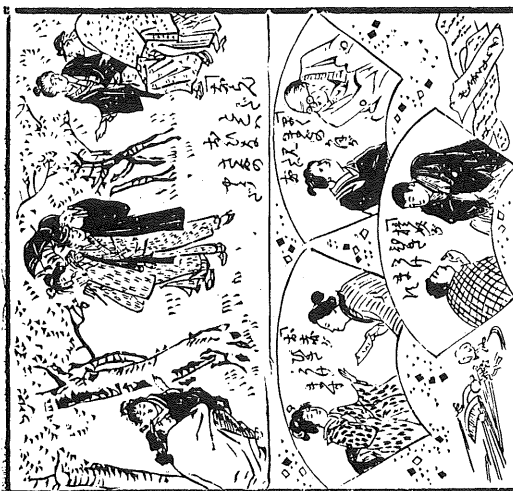
序	幕	全	原	常	樂	店	先	の	場
一	雁	部	誠	之	越	後	源	治	郎
一	加	賀	見	進	前	島	光	美	
一	若	イ	者	長	吉	小	島	茶	郎
一	番	遊	お	なる	高	松	琴	儀	
一	番	生	金	子	芳	野	鏡	馬	
一	辻		古	賢	津	田	理	三	郎
一	百	姓	百	六	山	本	僧	三	郎
一	仕	出	し	大	大				
一	女		郎	大	大				
一	婿	紋	糸	衣	高	田	福	雲	
一	全		白	玉	九	山	線		

五三

資料(4) 明治32年3月15日〈嬢のお政〉の小冊子  
 (早稲田大学演劇博物館所蔵、資料番号口24-00013-0463)



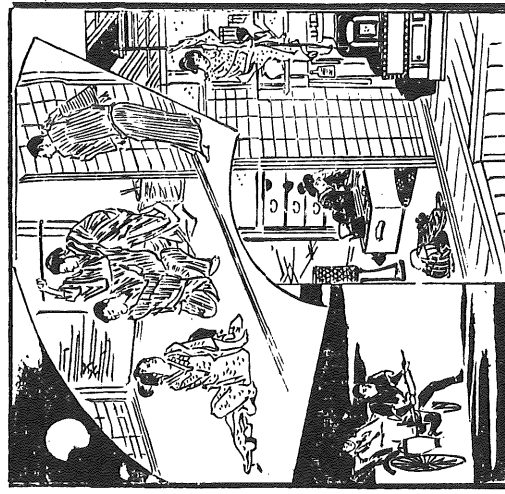
一全 出子山 大須賀 力  
 一毒 娘 小 毒 中嶋 常行  
 一職 人 八 藏 井口 升  
 一森 目 小 全 石 川 屋 藤 四 居 允 の 場  
 新 登 手 三 上 茶 心 の 場  
 備 後 三 門 谷 各 場  
 一母 浮 遊 郎 次 森 操  
 一野々 宮 秀 子 岡 本 貞 次 郎  
 一岡 居 先 女 房 お か 中 島 常 行  
 一若 者 長 吉 小 島 泰 三 郎  
 一郵便 配 夫 早 野 山 本 清 三 郎  
 一仕 出 し 大 勢  
 一娘 お の ぶ 藤 村 林 之 助  
 一新 聞 賈 町 田 鶴 太 郎  
 一乗 客 山 口 加 藤 馬 之 助



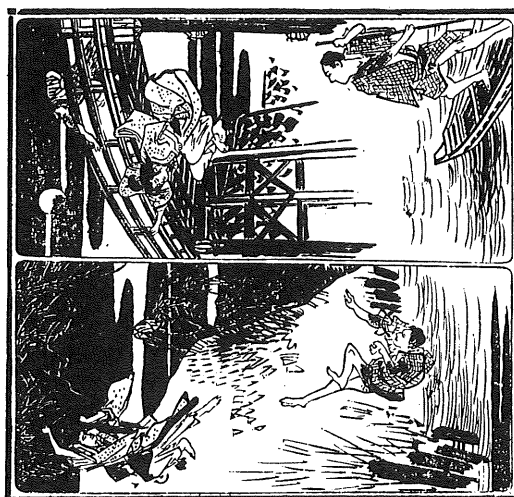
第二番目  
 上 飛 鳥 山 花 見 の 場  
 一親 分 常 盤 良 平 森 操  
 一母 お たり 中 島 常 行  
 一仲 常 盤 玉 三 郎 水 野 好 美  
 一娘 お 花 小 島 文 衛  
 一下 女 お 赤 岡 本 貞 次 郎  
 一夏 目 吾 六 服 部 谷 川  
 中 の 飛 鳥 家 屋 敷 の 場  
 一常 盤 玉 三 郎 水 野 好 美  
 一言 号 お 花 小 島 文 衛  
 一下 女 お 赤 岡 本 貞 次 郎  
 一門 番 榎 助 越 後 源 次 郎  
 一夏 目 吾 六 服 部 谷 川



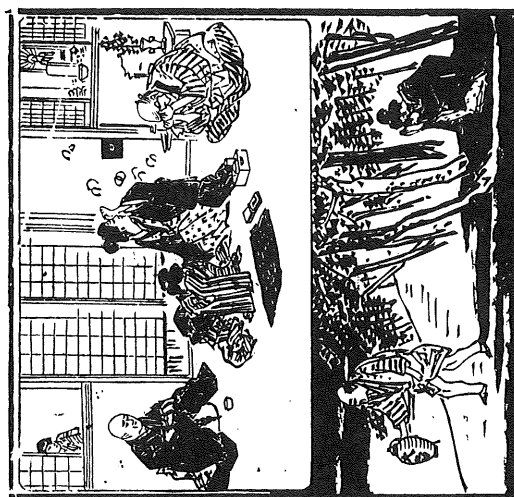
一常盤 貞平 森 操  
 一母 おたり 中島 常行  
 下 坂の 巻 怨  
 全編 坂 馬 橋 在 街 道 の 橋  
 一常盤 玉三郎 お花 住居の 母  
 一言号 お花 小島 文衛  
 一返目 吾六 服部 谷川  
 一演行 藝々 おしよ 高松 翠歌  
 一職人 三太郎 前崎 美美  
 一常盤 良平 森 操  
 一母 おたり 中島 常行  
 一下女 お赤 岡本 貞二郎  
 一門番 権助 越後 隆治郎  
 一乳母 おねい 河台 武雄



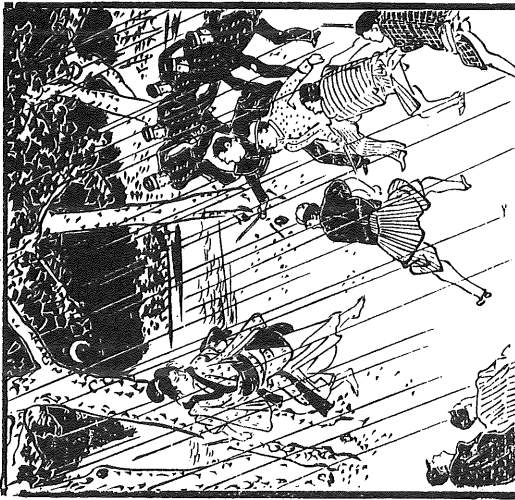
一紳士 矢部 高田 福松  
 一英國人 ドリエル 井口 昇  
 一刑部 大岡 三郎 櫻井 真太郎  
 一加賀 貞見 逸 前崎 美美  
 一雁 部 誠之 越後 隆治郎  
 一嘆 の お 政 河台 武雄  
 二番目 野毛 山花 櫻井 の  
 麻全居 堀四十二 櫻井 手の  
 一非人 内藤 新三郎 水野 野美  
 一妾 お定 まりのお 政 河台 武雄  
 一教員 大澤 次郎 前崎 光美  
 一服 部 誠之 越後 隆治郎  
 一學生 佐々木 次郎 櫻井 真太郎  
 一全 山 内 狂 芳野 敏馬



一 女學生 おたけ子 阪橋 谷川  
 一 全 しん子 高松 琴成  
 一 全 みさ子 丸山 操  
 一 全 きん子 高田 福松  
 一 全 りん子 藤村 林之助  
 一 仕 出 しし 大 須 賀 力  
 一 スリ 三 本 山 本 清 三郎  
 一 馬丁 久 助 大 須 賀 力  
 一 全 金 太 井 口 丹  
 一 悪 童 山 口 吉 野 敦 郎  
 一 女 中 およし 丸 山 操  
 一 支那人 金 輪 陸 穂 後 敦 治 郎  
 一 英 國 人 Y エル 井 口 丹  
 一 原 業 おしら 高 田 福 松  
 一 岸 澤 兄 長 谷 崎 甚 太 郎 大 須 賀 力  
 一 岸 澤 遊 喜 次 森 操  
 一 女 房 お 築 小 島 文 術



四 露 目 野 内 藤 菜 名 の 場  
 大 國 川 首 時 強 義 しの 場  
 一 内 藤 菊 二 郎 水 野 好 美  
 一 妾 お み ち 高 松 琴 成  
 一 下 女 お や さ 小 島 登 二 郎  
 一 權 助 權 兵 衛 井 口 丹  
 一 車 夫 正 助 山 本 清 三 郎  
 一 心 ざ 幸 三 郎 小 島 登 二 郎  
 一 刑 事 伊 東 秀 英 阪 橋 谷 川  
 一 全 大 國 三 郎 櫻 井 東 太 郎  
 一 車 夫 若 時 岡 本 貞 次 郎  
 一 さ び しの お 政 河 合 武 雄  
 大 話 内 田 喜 左 工 門 内 の 場  
 高 橋 淳 子 野 中 捕 物 の 場  
 一 内 田 喜 左 工 門 本 野 好 美  
 一 娘 お 清 小 島 文 術



一哲	順	念	服部	谷川
一庄	屋	孫	衛門	越後藤治郎
一百姓	幸	作	小島	榮二郎
一全	米	吉	芳野	數馬
一大工	金	二郎	山本	哲三郎
一田舎娘	お	ね	高田	福松
一郵便	配	達	丸山	操
一刑	事	大	勢	
一悪査	山	本	井口	井
一刊事	大	岡	三郎	橋井
一全	伊	東	秀英	服部
一全	山	田	猛	大須
一車夫	三	吉	津田	理二郎
一警部	淺	田	政夫	前島
一ぼしの	お	政	河合	武理

定價表		喰類定價表	
上等棧敷 <small>御堂名</small>	金三十錢	上並	金十八錢
同本高 <small>同</small>	金二十五錢	辨 <small>さ</small> 取 <small>か</small>	金十八錢
同新高 <small>同</small>	金二十錢	當	金十六錢
上等平土間 <small>同</small>	金十五錢	御	金十四錢
中等平土間 <small>同</small>	金十錢	人	金十二錢
木 <small>御堂名</small>	金四錢	金	金十錢
明治三十二年三月十五日		上水 <small>女</small>	金六錢
午前九時開場		酒 <small>井</small>	金六錢
		菓子	金五錢
		菓	金五錢
		葉	金五錢
		ち	金五錢
		御	金五錢
		並	金五錢

芝草公園

# 常盤屋

吉濱岸根産



## 〈毒婦〉と女子教育

偵実話『蝮のお政』に基づいたものであったと推測できる。ただし、芝居という性質上、そこに多少の脚色が施されているであろうことは、いうまでもない。

## 出所後の〈蝮のお政〉

〈蝮のお政〉こと、内田まさが最後に満期放免になったのは明治35年11月のことである。したがって、単行本化や上演によって、まさ本人の入獄中には、すでに〈蝮のお政〉は人口に膾炙していた。では、牢内にいながらにして世間の人気者になっていた女囚まさは、果たして出獄後にはどのような人生を辿ったのだろうか。

明治35年11月9日付「都新聞」には「蝮のお政の出獄と花井お梅の近状」と題されたつぎのような記事がみられる。

三十年の十月悪事露見し同年十一月十八日重禁錮五ヶ年監視一年の処刑を受け市ヶ谷監獄に送られたるが前科十犯の悪婦だけに工役の苦痛を善く耐へ忍び工業に勉強して規則を犯したることなく前科者でなくば疾に仮出獄の恩典に与かるべき筈なるが来る十一日にはいよいよ満期放免になることとなれば監視引受け人なきこととて同人は先頃より知辺の者へ宛て引受けの依頼をなしたれど名だたる悪婦と怖お恐れて引受けの者もなきにおまさも大に弱り果て今一度知人某の許へ所持金六十二円八十銭あるよしを書き添へて頼みたるに知るも知らぬも監視引受け人ならんと申込むもの七八人も俄に出来たるにぞ

四八

やや引用が長くなったが、まさの監視引受け人が容易にみつからなかったというのは世の常であり、前科者の社会復帰の難しさは今も変わらない。

また、その所持金で監視引受け人が集まったというのも、世情を物語っている。それはともかく、この記事の後には、所持金のうち60円を元手に、まさか獄中で覚えた機織りで事業を営もうとしていたと記されている。

この記事は、花井お梅の出所時期が翌年4月9日を予定していたことにも触れているのだが、晴れて出所する時には雅やかに着飾ることを画策していた、名の通った芸者だったお梅とは対照的なまさの性質が窺えよう。

出獄したまさか、希望通り機織り業を営むことができたのかどうか定かではないが、出所した2ヶ月後には、森三之助一座による「蝮のお政五幕」に出演している。その芝居番付を次頁に資料(5)として掲げよう。

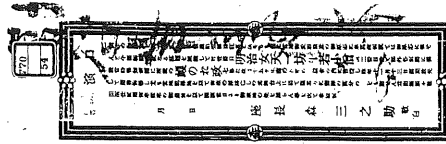
座長の森三之助とは、横浜生まれの壮士芝居の俳優だった人物で、のちに独立して一座を結成した。特に、浜松で花井お梅と同棲し、お梅と共演して箱屋殺しの峰吉に扮して名を馳せたといわれている。その森三之助が川上音次郎の渡欧後、壮士芝居を離れて〈毒婦もの〉を手がけるようになったとは、何とも不思議な成り行きである。

資料(5)の芝居番付に「本人出演いたし候」と記載されている。これは、すでに横浜葛座では明治24年9月から〈島津お政〉本人が出演した懺悔芝居が興行されており、その人気は島津お政が明治37年にアメリカのセントルイスで開催されたルイジアナ購入100周年記念博覧会を見物するため、渡米を予定していた明治37年頃まで続いていた。そうした「本人出演」の〈毒婦もの〉の流行に乗じて、入獄中からその名を知られていた内田まさもまた、自身の一代記を演じていたとみていい。この上演は、そのまま「第六回目」として興業が続けられた。その芝居番付が資料(6)である。

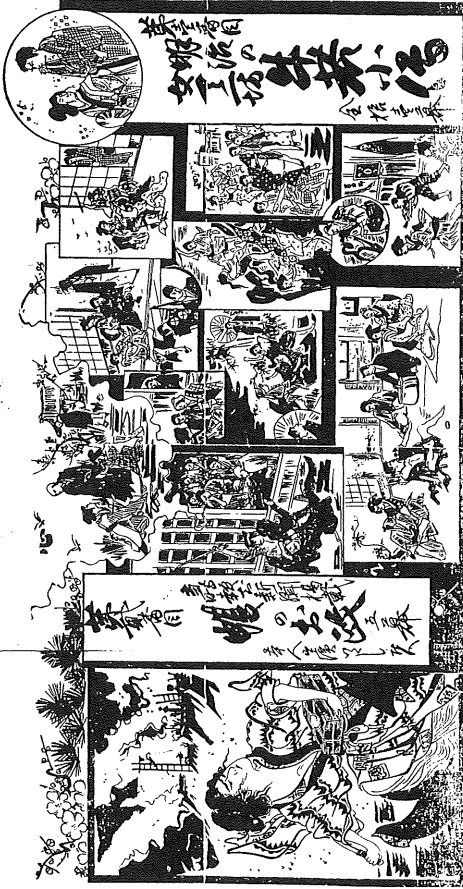
四七

資料(5)の芝居番付の冒頭に記された森三之助座長による口演には、「蝮のお政」の「満期放免」が「昨年(明治35年)十一月十三日」とされているが、これからすると前掲した明治35年11月9日付「都新聞」の記

# 第五回三森殿



明治三十六年一月十五日午後九時開演



本員座 客共  
小 大人 金七 銀銭  
五 金五 銀銭

**相生座**

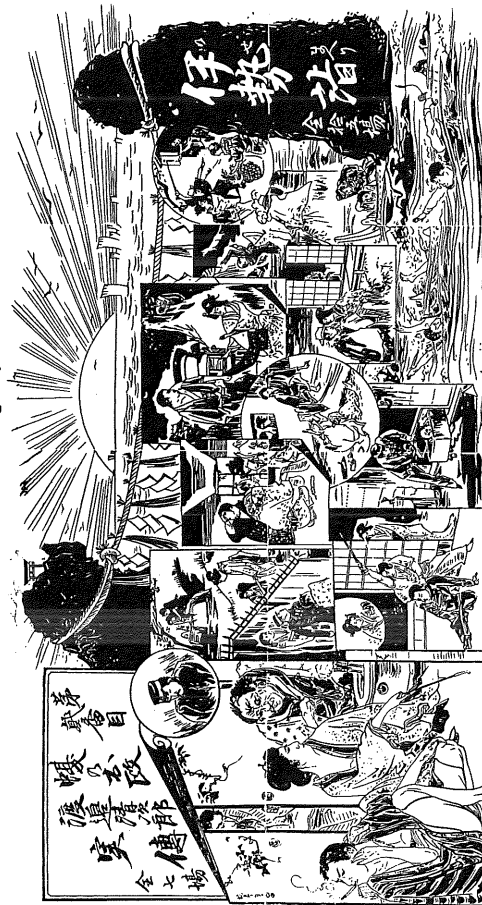
本座自牛若小僧  
... (text describing the troupe and performance details) ...

明治三十六年一月十五日

助之吉木々在傳劇部 行印所版活木輪町吉住居原

資料(5) 明治36年1月15日 〈嬢のお政〉の芝居番付 (横浜開港資料館所蔵)

# 第六回四森三之座一



明治三十六年一月三十一日午前十時開演  
 伊勢白  
 三之助  
 金七場

**相生座**  
 西乳新代調  
 本座自開演以來、蒙諸君之厚愛、無任感荷。茲因本座所演之戲、多有精彩之處、故特將本座之戲、再行更換。凡欲觀者、請早臨座。此佈。

謝之吉本々々在座劇影行印所版活本給町吉住流橋

水月即名共  
 小 大人各七錢  
 大 金五錢

資料(6) 明治36年1月30日 <嬢のお政>の芝居番付 (横浜開港資料館所蔵)

事とは食い違う。したがって、まさの正確な出所日が11月11日か13日かいずれであったのかを確定することはできないが、出所後に機織り業を経営していたとは考えにくい。監視引受け人との問題も見え隠れすることから、手っ取り早く役者になったと考える方が自然かもしれない。

また、資料(6)の芝居番付の同じく座長の口演には、「蝮のお政」の「悲惨な」人生と「毒婦の情性」を「活劇描写」していることが強調されているが、ここで注目しておかなければならないのは、資料(5)の口演である。

於政は十五年間の●年の●獄舎の内に苦役し昨年十一月十三日満期  
放免して遷善悔悟し尤も当地犯罪地を以て前来の罪滅亡しの為舞台上  
に出て諸君方に謝罪の万分の●をも謝せん為出場賑々敷開演仕候間何  
卒従来の御最辰を以て開演日より御来場の榮を賜らん事を伏て希望候

この座長の口演によれば、おまさが自ら舞台上上がったのは、「悔悟」したまさ、その「罪滅亡しの為」に世間に対して「謝罪」という意図からであったということがわかる。この懺悔や罪滅ぼしという発想で同じように舞台上上がっていたのが〈島津お政〉であった。時期は不詳(明治30年代と推測される)だが、横浜開港資料館に所蔵されている〈島津お政〉の肖像が掲げられた口上には、「無教育」から愚かな罪を犯したと述べ、それ故に自らの懺悔芝居によって「幼男婦女子をして家庭教育の一助たらしめん」という願いが記されている<sup>1)</sup>。それからすれば、前科10犯の内田おまさも〈島津お政〉と同様に、悔悟の念から舞台上上がり、それによって「毒婦」と謳われた〈蝮のお政〉が造形されていったとみることができよう。つまり、入獄中の〈蝮のお政〉の上演は、その美貌と前科10犯という経歴から興味本位に取り上げられたと考えられる。だが、出

所後に罪滅ぼしをするという意図から本人が舞台上上がったことで、〈毒婦〉の一人〈蝮のお政〉は、〈島津お政〉と同じように、「婦女子」のための社会教育へと向かっていったのである。

二人の〈毒婦お政〉たちは、身体を張って教育の重要性を訴えていった。とすれば、女子の就学率向上の立役者として、制度化されつつあった学校教育の伝道者として、〈毒婦〉たちは記憶されなければならない。

### おわりに

〈蝮のお政〉に関して、明治36年3月25日付「時事新聞」には、「蝮のお政一杯やらる 芝居だけに凄腕も振るえぬ」と題された、つぎのような記事が掲載されている。

蝮のお政といふ芸題にて目下開演中なる四谷荒木町の末広座にては、本物のお政を毎日舞台へ上せることゝなしたるより、狂言よりは之に人気を引き、毎日大入の好景気なりし

この記事は、突然一座の俳優たちが同盟罷業を企てたことで座内が混乱した顛末を報じたものだが、これからすると、お政は横浜相生座に続いて東京末広座にも出演していたようである。残念ながら、その後の〈蝮のお政〉の上演記録を確認することはできないが、明治31年から36年まで、〈蝮のお政〉が上演され、出所後の36年には〈島津お政〉と同様に悔悟した〈毒婦〉の懺悔芝居として人気を博していたことは明らかである。

拙稿「〈毒婦〉という教育——〈島津お政〉の造形にみる近代日本の文学と教育——」において取り上げた〈島津お政〉には、明治29年から36年までの間の上演記録に空白があった。だが、今回の調査で〈蝮のお

政〉が明治31年から36年にかけて上演されていた事実を確認することができた。したがって、「つづきもの」が明治20年代から衰退していったとする前掲した興津の論考は再検討されなければならない。

さらに、〈島津お政〉の懺悔芝居に端を発する〈毒婦もの〉の上演に〈蝮のお政〉も加えると、〈毒婦〉たちは明治24年から明治37年までの13年間、自らの経歴を曝け出しながら女子教育の重要性を広めていったということになる。そうすると、〈毒婦〉たちが活躍した時期と重なるように、女子の就学率が上昇していった事実は見逃せない。

明治5年の「学制」公布以来、依然として女子の就学率は低迷が続いていた。〈毒婦〉たちが活躍し始めた明治25年さえ、女子の就学率は36.46%しかない。男子の就学率が80%を越えた明治30年でさえ、女子の就学率は50.86%である。ところが、〈毒婦もの〉が全国を巡業しながら上演されるにしたがって、その就学率は急上昇し、明治40年には男子98.53%に迫る96.14%にまで上がる<sup>12</sup>。こうした女子の就学率増加の背景に、〈毒婦〉たちが大きく貢献していたのではなかろうか。〈毒婦もの〉は、日本近代文学史研究の観点から見直されなければならないだろうが、日本教育史の一諸相としても再考すべき問題を孕んでいると思われる。

なお、明治38年以降には箱屋殺しで〈毒婦〉と呼ばれた酔月の「花井お梅」も登場するようになるが、それについては稿を改めて論じたい。

注

1. 『日本国語大辞典第14巻』 昭和51.4 小学館 603頁
2. 1992.8 紀伊國屋書店
3. 1999.4 平凡社
4. 2に同じ 152頁
5. 2に同じ 7頁
6. 『明治開化期文学の研究』所収 1968.1 桜楓社

7. 「学校教育学研究論集第6号」 2002.11 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
8. 『早稲田大学演劇博物館所蔵特別資料目録8 芝居番付明治編東京・横浜の部(下)』 2003.4 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 299頁
9. 1999.1 岩波文庫 209～222頁
10. 9に同じ 218頁
11. 7に同じ 89頁
12. 教師養成研究会『近代教育史』平成12.3 学芸図書 132頁

〈付記〉

本稿は、平成20年12月13日に開催された同朋大学学術大会（於同朋大学）における口頭発表「〈毒婦〉という教育——近代日本形成期における女子教育の諸相——」を基にしている。また、ここに掲載した資料の調査及び使用許可に関しては、横浜開港資料館と早稲田大学演劇博物館の両館に格別なご高配を賜りました。ここに記して深謝いたします。

なお、本稿は、本学特定研究費による成果の一部である。